

# なからぎ

169号

2004年10月

## 読書の思い出

学生部長 松 井 裕

「なからぎ」に寄稿を依頼され、さて何を書けばよいものかと考えているうちに締め切り日になってしまった。図書館報だから自分の読書体験でも書こうと思う。読書といえば私は大分年を取って、小さな活字が見にくくなったこともあるが、学校で講義をするのに必要な書物を除いては、最近ほとんど書を読むことがなくなったと思う。しかし、読書をしなくなったというのは多分、今生きているこの現在、自分にとって心を揺さぶる強い関心事や葛藤する悩みがないということに他ならない。

振り返るに、小学生の頃は「いがぐりくん」に「赤銅鈴之助」とかの漫画をむさぼり読んでいたし、祖母が朝日新聞に連載されていた村上元三作、「源義経」を毎日読んでくれて、これを楽しみにしていた記憶がある。これがきっかけで「鎮西八郎為朝（小説題名は違っているようだが）」などの子供向け時代小説を小学校の図書室から借りてきて読んで覚えがある。中学生や高校生になると、さらに大学生のはじめの頃までは、自己にさまざまな恋心が芽生えてきて、それに呼応するような淡い恋心をくすぐるような夏目漱石の作品、「坊ちゃん、草枕、虞美人草、三四郎、それから、門、こころ、等々」や川端康成の「伊豆の踊子、雪国」とか伊藤左千夫の「野菊の墓」とか、石坂洋次郎の「陽の当たる坂道、等々」そういった類の小説に夢中になった。20才代には失恋をきっかけに、福永武彦の「草の花、忘却の河等」を読みつつ、感傷的な気分で心の傷を癒していたし、30才代になると恋愛的なものには少々飽きて、吉川英治をはじめとする作家の「三国志、水滸伝など」の中国を舞台にしたものや「織田信長、太閤秀吉、徳川家康、太平記など」の歴史小説、さらには井上靖の諸作品や城山三郎のサラリーマンものとかに関心が移り、40才代から50才代にかけては松本清張や横溝正史、内田康夫、西村京太郎の推理物から藤沢周平、池波正太郎の時代物等へと変遷していった。特に、藤沢周平の作品が好きで、根こそぎ読んだように思うし、人生の哀歓を描いた作品群は中年時代では最も心に残っている。かくの如く、自己のおかれた年令、状況に合わせて、興味・関心、心に響くものが変わるので、読書への関心は移ろいやすいものである。その時の心の状況にマッチしたものは読み耽ることになるし、マッチしていないものはその時はとても読み進めないというのが私の読書体験である。私としては、そのうちに、再び新しいジャンルの作品を読み耽る時が来るように思う。

(まつい ひろし：農学研究科教授)

## ある雑誌の廃刊

図書館運営委員 武田 公子

定期購読していた*Der Städtetag*という雑誌が廃刊となった。もともと発行が遅れ気味であった上、船便で送られていたので、廃刊に気づいた時には最終号が出て半年も経ってしまっていた。同誌は、ドイツ都市会議という自治体代表団体の一つの機関誌であり、ドイツの自治体に関する研究をする者にとっては不可欠な雑誌のひとつであった。毎月特集テーマを組み、各都市のルポや都市会議独自の調査報告を盛り込んだ充実した記事を掲載しており、また近年カラー化されて手にとって眺めるだけでも楽しい雑誌となっていた。特に、年一度掲載される「市町村財政報告」は、都市会議独自の情報収集をもとにHans KarrenbergとEngelbert Münstermannという二人の研究者が執筆してきた報告文書であり、日本の『地方財政白書』にあたるものがないドイツでは貴重なデータや分析を提供するものだったのだ。この二人の執筆者の高齢化と健康上の理由で、2001年の「財政報告」が欠号となってしまったときにもショックを受けたものだが、今回の廃刊を知って青ざめた国内の同業者は、少なくとも10人はいるはずだ。

そもそも都市会議とは、郡会議、市町村同盟とならぶドイツにおける地方代表団体Spitzenverbändeの一つである。日本にも「地方六団体」と呼ばれる類似の組織があるが、全

国知事会、市長会のように首長による組織という性格をもつ。ドイツの地方代表団体は、概して私法上の法人でしかも非登録団体（日本でいうNPO法人ですらない、というようなもの）ではあるものの、それぞれ郡格市、郡、郡所属市町村を中心に団体単位での加盟を原則としており、任意加入とはいえほとんどの自治体を組織しているといつてよい。各州にはそれぞれの地域団体があり（というより元来こうした地域団体を組織して中央組織ができた）、各州では州法の制定・改廃に際してこれら地域団体に聴聞することが義務づけられており、その意味では日本の六団体よりも強い政治的発言権を持っているといえる。こうした地方代表団体のうち、最も大規模で、また最も古い歴史をもつのがドイツ都市会議である。

ドイツ国内の全ての都市を対象とした組織であり、間接会員（市町村同盟に属する自治体）を含めて5500以上の団体を擁している。

その機関誌である*Der Städtetag*はかなり古い歴史をもっている。都市会議自体は1905年に設立され、同誌の前身である*Mitteilungen der Zentralstelle des Deutschen Städtetages*（都市会議事務局通信）が1907年に創刊された。

その後誌名の変遷を経て1927年には現在の名称となったが、巻号は1907年から継続して付されている。ナチ期の1933年1月には都市会

議自体が他の代表団体ともども強制的に解散させられ、官製団体である「ドイツ市町村会議」に統合・吸収されたことに伴い、雑誌も一旦廃刊となった。戦後、紆余曲折を経て1948年に都市会議は再建され、*Der Städtetag*も*Neue Folge* (復刊号)として再出発したのである。

これほどの歴史をもつ雑誌なのに、また分権化のなかで都市会議自体の役割も一層重要性を増すなかで、なぜ廃刊なのだ、としばらく頭を悩ませていたのだが、よくよく見ると最終号の2号前に廃刊の辞が掲載されていたではないか。それによると、廃刊の理由は次のごとくである。第一の理由としては財務の赤字化が挙げられているものの、第二の、そしてより本質的な理由としては、都市会議の広報活動の重点を紙ベースの出版から電子媒体による情報提供に移していきたいとのことである。

加盟自治体の要請として、ネット上での迅速な情報交換と確実な紙媒体の専門誌との両者が求められることは理解するが、限られた

資源のなかで活動していくには、前者に重点を置かざるを得ない、ということである。同誌の目玉のひとつであった「市町村財政報告」については、電子媒体での提供を示唆しているものの、今のところ、具体的な情報は得られていない。

ITの発達は確かに我々に大きな利便をもたらしている。一昔であれば、現地の文書館に赴かなければ手に入らなかったような行政文書や議会文書も、居ながらにして検索でき、ダウンロードができてしまう。統計書の類の多くも、印刷媒体から表計算ソフト形式の電子媒体での提供に切り替わってきており、手作業で作って電卓で計算していた昔を思うと、隔日の感がある。とはいうものの、ウェブ上の情報というものは、データベース化されるものでないかぎり、一定期間経過後にはアクセスできなくなるというリスクが伴う。保存しておかない限り、二度と情報を確認することができなくなるのである。この点、紙媒体の保存性とは安心感が異なる。また、画面上で文書を閲覧することはかなりつらい作業となるため、結局はプリントアウトしてそれを読むことになるわけで、結局のところペーパーレスどころか多大な紙を消費することになる。

それにも増して、こうした伝統ある雑誌が消えてしまうことに何とも言えない寂しさがある。ナチの制圧下で一旦廃刊された雑誌も、15年を隔ててではあるが復刊することはできた。しかしIT化によって駆逐されてしまった雑誌には、もはや復刊はあり得ないのかと思うと、少々ぞろぞろしい気もする。



(最後の「市町村財政報告」が掲載された2003年9月号)

(たけだ きみこ：福祉社会部助教授)

資料との確かな出会いを ~ 他大学等の利用、コピー・図書の取り寄せのご案内 ~

日頃の研究や論文作成の中で「目をとりたい資料が見つかった！しかし、府大にはない・・・」と、がっかりされることも多いと思います。申し訳ありません。が、こんな思いをしているのは頻度の違いはあるものの本学だけではありません。有名なあの大きな大学でも、国立国会図書館にさえ、この世の中に存在する全ての資料が揃っているわけではありません。

そこで頼りになるのが、図書館の相互協力のシステム。お互い様の助け合い精神が図書館界には、浸透しています。それは日本国内にとどまりません。世界中の図書館が手を取り合い、求める人に資料を提供しているのです。


大学図書館間では、国立情報学研究所という機関が中心になり今年の 4 月から、本の取り寄せやコピーの料金を相殺する「ILL 文献複写等料金相殺サービス」が開始されました。この制度では振込手数料は個々には不要で、大学間の請求書処理もありません。今までは「公費ではできない」「コピー代以上に振込料がかかる」などのご不便をおかけしてきましたが、少しでも解消できればと、本学も 5 月から加入しました。現在 500 以上の組織がこの制度に参加しています(但し、未加入館も多くあり、そこのやりとりは従来どおり)。これに伴い、他大学からの本学への依頼も大幅に増え、8 月末現在でコピーの受付件数は、既に昨年度 1 年間の実績を 200 件以上超えています(前年度同期の約 5 倍)。図書の貸出受付件数も倍以上となっています。しかし、他大学へ依頼する件数は相変わらず多く、コピーは前年度同期の 1.2 倍強(図書の取り寄せは 1.5 倍強)となっています。

また、比較的近くに多く大学が存在することから、他大学へ閲覧に行かれるケースも多くあります。こちらの方は、8 月末現在で 225 件(資料点数はこの数倍)、9 月に入り、益々増加しています。他大学は閲覧コピーのみですが、公共図書館は紹介状不要で貸出できますので、使いわけると便利です(総合資料館は閲覧コピーのみ)。

さて、次ページに、自分が欲しい資料にたどりつくまでをフローチャートにしました。参考にしてください。

なお、他大学利用の際の注意を。

当たり前ですが、**まずは府大の蔵書を調べてから、ないものを他大学へ依頼してください。**

資料を特定するため、WebCat を検索された時、右の図の  部分の記号を記入していただくと間違いありません。あるいは、図書なら「ISBN」雑誌なら「ISSN」でも OK です。

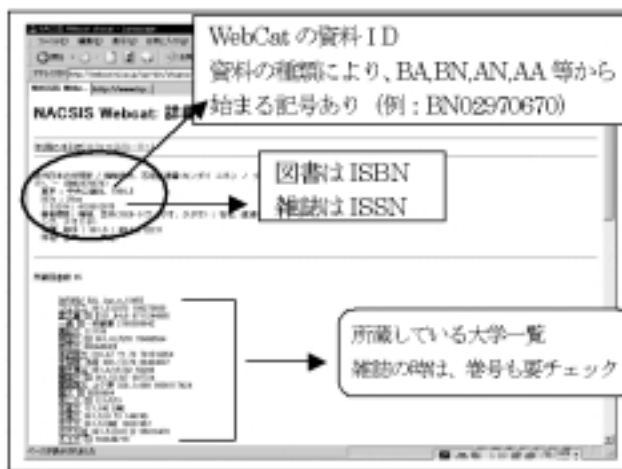
**直接来館には、原則として自分が所属している大学図書館を通じて事前照会が必要**です。利用したい資料と閲覧を希望する大学を決め、**行きたい日の前日までに**、図書館カウンターで「**閲覧希望申請書**」を記入してください。FAX でその大学に照会后回答をいただき、紹介状等を作成します。

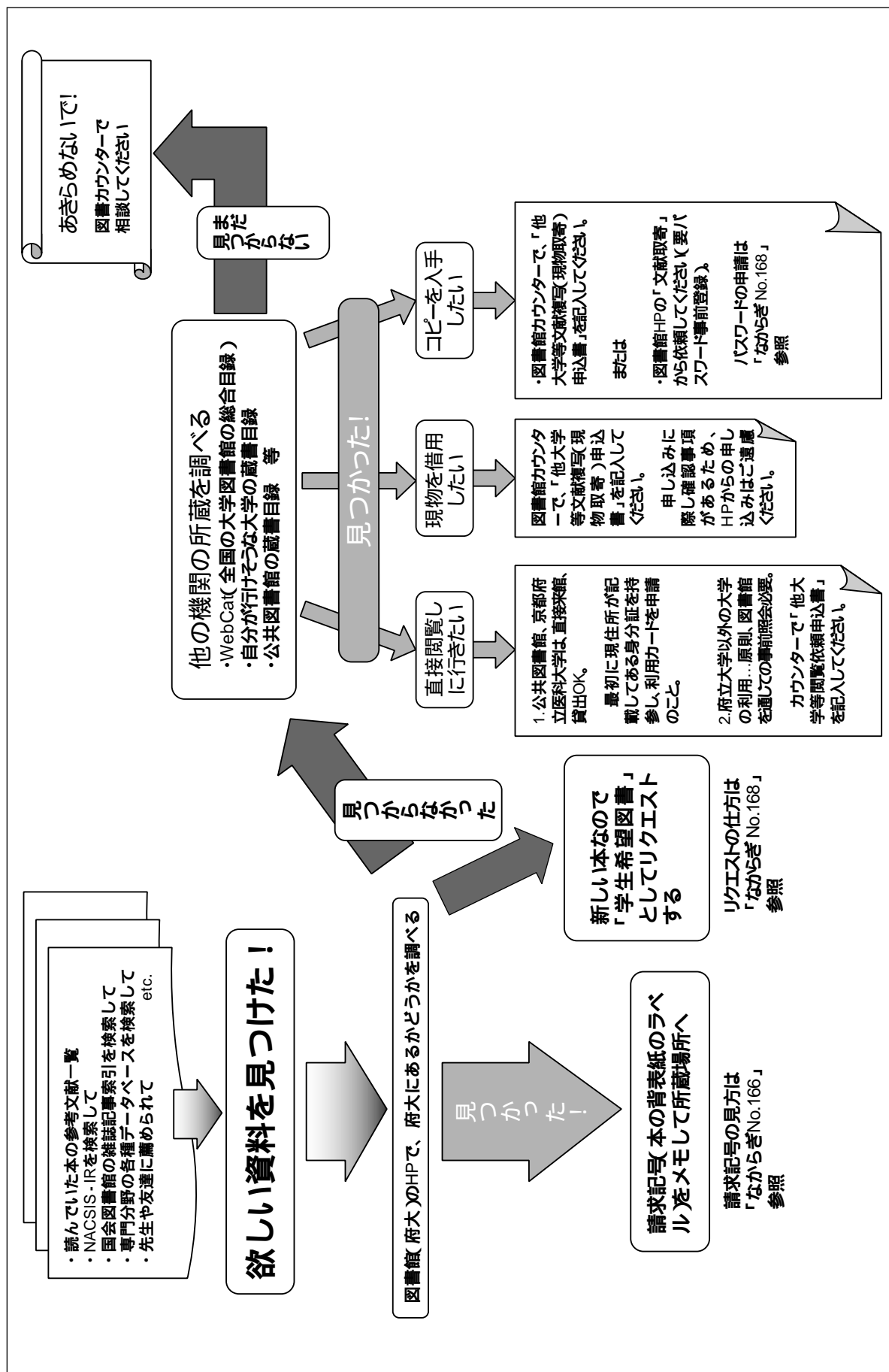
**コピー・図書の取り寄せ**に関しては、**雑誌名(図書名)、巻号、発行年、著者、論題**等のわかっていることをできるだけ詳しくお知らせください。これを知った出典等も記載していただくと助かります。また、お金がかかりますので、私費(自分で料金を負担する)か、公費(教員の研究費からの支出なので、必ず事前に担当教員の許可をもらい、講座名と担当教員名を記入してください)かご指示ください。

取り寄せ依頼にかかる料金ですが、コピー代はもちろん、送料を負担していただきます。料金は大学等により様々ですが、35~40 円が多いようです。特に私費の場合、近くの大学にあれば足を運んだ方が絶対安いです。時間を使うか、お金を使うか、思案のしどころです。

図書の取り寄せに関しては、ちょっとご注意を。いろいろなケースがありますので、事前に職員によく相談してください。なお、借り受けた資料の府大の図書館内での複写は、著作権法上によりできません。コピーは資料の返却時に申し込みますので、ご了解ください。

本学図書館も資料の充実には努めています。なかなか厳しい情勢。しかし、府大にないからとあきらめず、府大にない時でも図書館カウンターでご相談ください。資料との出会いは図書館から！





7月29日(木)、30日(金)の両日開催されたオープンキャンパスは、期間中お天気にも恵まれ、盛況の学部ガイダンス等時間割の合間をぬって、参加者のうち約3割の皆さんが図書館へもお越しいただきました。昨年同様、平日とあって、参考図書コーナーで調べものをする先輩たちの姿を横目に、出来るだけ私語を控え、ソオーッと閲覧室の書架巡りをする受験生たちの様子はとても真剣に見えました。一方、図書館の職員は、通常業務をこなしながらの対応でしたが、オープンキャンパス用シフトを組んで万全のお出迎え体制で待機しました。入館者数は第1日目は残念ながら昨年よりやや少な目の約240人、第2日目は約180人。しかし昨年と較べるとトータルでまずまずの入館状況でした。夏休み中の家族旅行のスケジュールに組み込んで参加された遠来組も多く、「北海道」から来られたお母さんは、「祇園祭の頃の蒸し暑さは話には聞いていましたが、京都の夏はやはり、格別ですね！」などと図書館と関係のな



いところで妙に納得しておられたようです。受験生はもちろん、ご父兄の方も書庫から談話室まで、エネルギーに足を運んでくださいました。3階自習室の壁に掛かる当校所蔵のお宝『京都名所大鳥瞰図』(大正の広重 吉田初三郎の作品)も、平日頃見かけない多くの若い瞳に見つめられて久しぶりに晴れがましかったかも知れません。そして、「本学の学生となって、ゆっくり、じっくりと鑑賞しにきてネ」と、この2日間にわたり精一杯の激励の辞を述べたことでしよう。  
(資料係)

04 オープンキャンパス  
見て歩記

# カレンダー

2004年10月							2004年11月							2004年12月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
					1	2		1	2	3	4	5	6				1	2	3	4
3	4	5	6	7	8	9	7	8	9	10	11	12	13	5	6	7	8	9	10	11
10	11	12	13	14	15	16	14	15	16	17	18	19	20	12	13	14	15	16	17	18
17	18	19	20	21	22	23	21	22	23	24	25	26	27	19	20	21	22	23	24	25
24	25	26	27	28	29	30	28	29	30					26	27	28	29	30	31	
31																				

【10/1(金)~ 通常貸出実施 (貸出冊数6冊以内、返却期限2週間以内)】  
 【10/11(月) 体育の日】

【11/1(月)~ 通常貸出実施 (貸出冊数6冊以内、返却期限2週間以内)】  
 【11/12(金) 六公立戦、11/18(木) 推薦入試】  
 【11/3(水) 文化の日、11/5(金) 本学創立記念日、11/23(火) 勤労感謝の日】

【12/10(金)~ 21(月) 冬休み貸出実施 (貸出冊数6冊以内、返却期限~1/13(木))】  
 【12/23(木) 天皇誕生日】  
 【12/28(火)~ 1/4(火) 年末年始休館 新年は1/5(水)から開館】

開館時間等	
通常開館	9:00 - 20:00
※※※※※※※※※※※※※※※※	全学休講日 (11/12、11/18) 9:00 - 16:45
冬期休業 (12/24~1/12)	9:00 - 16:45
休館日	土・日・祝祭日